

夏に挑む

この夏、各種全国大会で活躍した本市の小中高生たち
彼らの夏の挑戦に迫る



千枝

Chieda
Hiiro

紘

佐沼小6年
迫町大網東

第52回和道会 全国空手道競技大会 小学6年男子の部優勝

第52回和道会全国空手道競技大会は8月20、21の両日、日本武道館で開かれた。宮城県代表として出場した千枝は、4年ぶり2度目の優勝を果たした。

千枝は、過去にこの大会で準優勝1回、3位2回と、所属する和道会さま(武川秀和館長)はもとより、和道会宮城県本部が期待するスーパーキッズ。

「県予選で負けて、全小(全日本少年少女空手道大会)に出られず悔しかったです。この大会は絶対優勝すると決めていました」と、優しい笑顔に似合わない負けん気をのぞかせる。

持ち味は、圧倒的な攻撃力。どんな相手でも後ろに引かず、得意のきざみ突きと裏回し蹴りを武器に、攻撃を仕掛けていく。

今大会一番の山場は、準々決

勝の西貴音(成友塾三川所属、静岡県戦)。

「初めて対戦する相手でした。自分から攻撃をしないで、引いて待つタイプなのでやりづらかった」。空手では、千枝のような攻撃型の選手と対戦する場合、無理に仕掛けずカウンターを合わせるタイプのことを「待ち」と言う。

試合開始から攻め込む千枝に、かわす西。不用意に攻め込んだところ、突きを合わされ、リードされる。しかし直後に、突きでポイントを奪い返し同点に持ち込む。その後、互いに攻め手を欠き、勝負は旗判定に。旗は4本とも、千枝に上がった。終始攻め込む姿勢が評価された。

迎えた決勝、相手は「待ち」だが、しつかり崩せば勝てる自信があった。試合開始から30秒、得意のきざみ突きで先制。その後は、一進一退の攻防。終盤、千枝が攻め、中途半端な間合いになり、突きを合わされ同点に追いつかれる。

残り時間、旗判定になれば勝つ自信はあったが、それで終わらせない。試合再開と同時に、相手懐へ飛び込み突きを決め、優勝を掴み取った。

空手を始めたのは5歳の頃。知り合いの紹介で和道会

はさまに入門した。武川館長は「当時は、元気で体を動かすのが好きな子どもという印象。ここまでの選手に成長すると、思ってもみませんでした」と成長ぶりに目を細める。

「(三上) 瑛大君と(武川) 史穂君がいたから強くなれました。来年は、3人で表彰に登りたいです」。千枝と三上、武川は同級生。先に入門していた三上と武川に、追いつき追い越せて努力してきた。この3人は各大会で上位を占め、将来を期待されている。

今後の目標を聞いた。「来年は中学生。中学生になると、学年分けがなくなり、3年生とも試合をします。3年生に勝てるよう、稽古を頑張ります。絶対に負けたくないんで」

全日本空手道連盟和道会

国内1350支部、海外250支部、会員約185万人、有段者約18万人(1997年9月現在)を擁し、空手団体としては日本有数の規模を誇る。柔術(神道揚心流)の影響が濃い流派で「さばき」「流し」「押し」「引き」「入り身」「転身」などの技法が特徴。松濤館流、剛柔流、糸東流と並び、空手の4大流派の一つに数えられている。

「絶対負けたくない」